新しいアートの流れを大阪から世界に

大阪中之島美術館が来年2月に開館。菅谷富夫館長に聞く。

新しいアートの潮流を大阪から世界に――大阪中之島美術館が2022年2月2日、水都・大阪のシンボル・中之島に開館します。大阪市制100周年記念事業の一つとして近代美術館建設構想が打ち出されてから39年、準備室が設置されて30余年。激しい社会変化を乗り越えて、市民待望の文化的拠点の誕生です。2025年の大阪・関西万博に向けて大阪が新たな都市の未来を開こうとしているいま、どのような美術館を目指しているのか。菅谷富夫・同美術館長にお聞きしました。

聞き手　ジャーナリスト、池田知隆

プレチラシ

池田　開館が間近になりましたね。

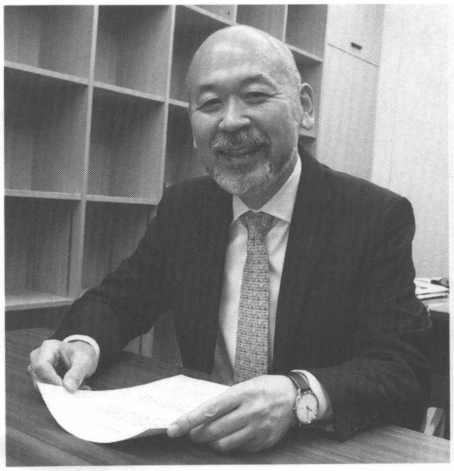
菅谷　これだけ大きな美術館が新設されるのは国内でもひさしぶりのこと。しかも、PFI法によるコンセッション方式（民間事業者が経営に直接携わる公共施設等運営事業）を日本の美術館として初めて導入しました。「民間の知恵を最大限活用しながら、顧客目線を重視し利用者サービスに優れたミュージアム」として、大阪という都市の魅力の発展、進化、発信のための新たな美の拠点づくりに挑戦しています。

池田　美術館のコンセプトに「パッサージュ」をあげられていますが。

菅谷　「パッサージュ(passage)」とは、フランス語で歩行者専用のアーケードで囲われた通路や自由に歩ける小径のこと。誰でも気軽に立ち寄れる魅力的な「場」で、館内を通るだけでもいいです。そこにレストランやショップがあり、ちょっと美術館に入ってみようか、と思ってもらえたらうれしい。「展覧会入場者だけでなく幅広い世代の人が誰でも気軽に自由に訪れることのできる賑わいのあるオープンな屋内空間」として公募設計コンペで選ばれたのが建築家、遠藤克彦氏による提案でした。1階から5階までの吹き抜け天井から柔らかく光が降り注ぐ立体的な空間になっています。

池田　「黒い直方体」というとても斬新な外観ですね。

菅谷　黒という色は嫌味を感じさせません。黒い建物のところどころにあるガラス面から光があふれて、あの中に何があるの



菅谷富夫館長

外観写真

だろうか、と好奇心をそそられます。中之島という多様な都市施設がある中で美術館の存在を浮き立たせるデザイン的な特徴だけでありません。ガラス張りの建物は光を反射しますので、黒い壁で囲った建築は周囲の環境への影響にも配慮しています。

池田　館内はどのような構成に。

菅谷　1階にはレストランやショップなどのサービス施設があり、だれもが気軽に入れ、にぎわいが生まれるようにしています。ホールやワークショップルームでは講演会、落語会、レセプションなど多彩なプログラムが開催できます。

2階からは歩行者デッキを介して周辺の敷地とつながり、多方向に出入口を設け、誰もが気軽にアクセスでき、「回遊」を楽しめるように工夫されています。吹き抜け内に大胆に設置されたエスカレーターは来館者の気持ちを盛り上げてくれると思います。

4階、5階が展示室です。特別展や企画展を開く5階は天井高6㍍で約1700平方㍍と広く、これまで大阪ではなかなか開催できなかった大規模な展覧会も可能です。

池田　美術館前の広場に巨大な猫のパブリックアート。ヘルメットを着け、鮮やかな朱をまとった猫がとてもユニークですね。

菅谷　これは大阪出身のアーティスト、ヤノベケンジさんが制作した「SHIP'S CAT」シリーズの一

巨大な猫のパブリックアートについて語る菅谷館長

内観写真

つ、「SHIP'S CAT（Muse）」です。「SHIP'S CAT」とは、大航海時代に長い航海に乗船した「船乗り猫」のことですが、ネズミなどの害獣を駆除し、貨物が食べられたり、疫病が流行したりすることから守るために乗せられていたそうです。ときに船員の心を癒したり、天候を読んだり、危機を察知する能力もあり、「守り神」とされてきました。未来を見通せるように、目やヘルメットを光らせ、勇気や冒険心を象徴するために鎧のような衣裳をつけ、美術館とともに未来を旅するパブリックアートです。

内観写真

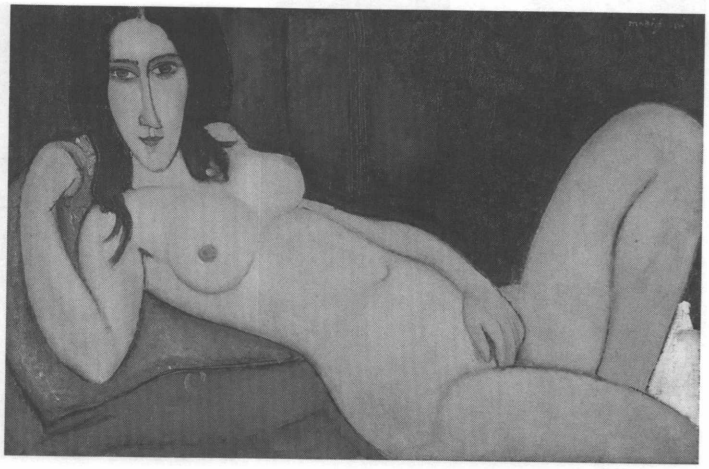
さらにこの広場は、堂島川に面した旧広島藩蔵屋敷の跡で各地の船が出入りしている船着き場がありました。この地から川を通して世界につながり、新しいアートの潮流を発信していきたいですね。

池田　収蔵品の特徴は。

菅谷　佐伯祐三の「郵便配達夫」などのコレクションや福田平八郎画伯の日本画「漣」のほか、モディリアーニの「髪をほどいた横たわる裸婦」などの世界的に知られる作品もあります。これは1989年に19億3000万円で大阪市が購入し、地方自治体が購入した作品では一番高いといわれています。また関西の前衛的な美術グループ「具体美術協会」リーダーの吉原治良（よしはら・じろう）の作品約800点などを含め収蔵品は6000点を超えます。近代美術を中心とした海外の作品が約800点。残りの作品は日本の作品で、その中には油彩約400点、日本画約200点、水彩・素描約600点などが含まれます。

デザイン分野の作品も多く収集しています。休館したサントリーミュージアム〔天保山〕からは近代から現代に至るポスターの一大コレクション、「サントリーポスターコレクション」をお預かりしており、世界のデザインミュージアムと比べても遜色ありません。

池田　大阪には府立の美術館はなく、これまで大阪での美術の存在感は薄いような感じがしていましたが。



髪をほどいた横たわる裸婦

菅谷　大阪では江戸期から多くの商人たちが美術品を収集し、芸術に造詣の深い商人も少なくありません。中国の影響を受けた文人画は大阪がその中心地のひとつでした。商人の間では習い事が盛んで、戦前期には意外なほど多く女性の美術作家が生まれています。安井仲治（やすい・なかじ）など、昭和初期には多くの写真家も活躍しています。紙を扱う商店に生まれた安井は多彩な分野で、枠にとらわれず、技巧に走らない人間的な作品を数多く残していますよ。

戦後、「具体」をリードした吉原治良は油問屋（後の吉原製油）に生まれ、作品が売れることなど考えず、自分がやりたいことをやり、最先端の前衛作品を多く生み出しています。大阪には常に新しいアートを生み出す土壌がありました。具体のメンバーで美大へ行ったのは2、3人で、吉原治良はじめ独学の作家が多い。それでも世界的な美術家になれるというのが大阪の美術の大きな特徴でした。

池田　大阪は、意外にも「美術都市」だったのですね。

菅谷　そうです。近代日本の美術史は、フェノロサ・岡倉天心に始まる東京美術学校（東京藝術大学）を中心としてつくられてきました。しかし、それとは異なる文脈で大阪の美術というものが江戸時代からあり、市民の間で楽しみながらさまざまなアートを生み出してきたのです。大阪という視点からみれば、こんな美術の歴史があったのか、こんな人物がいたのか、という新しい発見があります。これまでのアカデミックで単線的な美術史や西欧中心の世界だけでなく、もっと多様な視点を導入することで、新たな可能性を拓かれます。それこそ、かつて中之島に本拠地を持ち、世界を驚かせた吉原治良と具体の精神を受け継ぐものです。

各地の展覧会で選考委員を務めた経験からも、入選者のうち大阪出身の人がとても多いという印象があります。大阪出身のアーティストから「大阪には美術館がないから、死後、作品を収めるところがない」という嘆きを聞かされたこともあります。大阪の美術を振興していく役割も果たしていきたいですね。

池田　それにしても、開館までの準備期間が長かったですね。準備室に入られた時、**菅谷**さんはおいくつだったのですか。

菅谷　平成4（1992）年の春、34歳でした。大阪市が市制100周年を記念して近代美術館建設の基本構想を発表したのは昭和58（1983）年で、それから9年後、美術館建設準備室が発足して2年目です。バブル崩壊に伴う財政問題が浮かび上がり、平松市政から維新・橋下市政への転換などもあり、何度か基本計画を変更しています。美術館を取り巻く環境が変わり、時代に合わせるかたちで、30年かけて新しい美術館のあり方を模索してきました。

いつも思っているのは、大阪に行くのならあそこだよね、といわれるような美術館になりたいということ。大阪の美術館として積み重ねてきたものを、ぜひみなさんにごらんいただきたい。

池田　これからのコレクションの収集方針は。

菅谷　当館の収集方針としては次の5点を掲げています。

1. 佐伯祐三を中心とする近代美術の作品と資料
2. 大阪と関わりのある近代・現代美術の作品と資料
3. 近代・現代美術の代表的作品と資料
4. 大阪と関わりのある近代・現代デザインの作品と資料
5. 近代・現代デザインの代表的作品と資料

このほか、アジアの作家たちの作品にも注目し、大阪と現代という視点からも収集に努めています。

池田　21世紀の新しい美術館として目指していることは。

菅谷　一つは機能として「アーカイブ」、次に様々な施設、機関と「連携」、そしてさきほどお話しした「大阪からの視点」です。

美術館では展覧会の活動は基本ですが、その一方で、アーカイブ機能も充実していきます。美術館のアーカイブとは、作家や美術作品にまつわるスケッチや写真、手紙、展覧会記録といったあらゆる資料を収集し、整理、公開する機関のこと。美術作品のコレクションと違い、資料が展覧会で日の目を見る機会は限られています。収蔵されながら外部には存在すら知られることのないケースも多く、各美術館の資料センター的なものが日本では定着していません。

当館では、所蔵する全アーカイブ資料のデータベースを公開する予定です。資料名や作家名、年代などの情報をパソコン画面上で検索し、概要を確認した上で、必要な資料があれば手続きを経てできる限り現物を見られるようにします。貴重な資料も手続きすれば見られるようにして、各館で資料情報を共有できるようにしていきたいですね。

連携による活動も重視しています。学芸員は10人ですが、外部の専門家と一緒にアーカイブや美術館教育も進めたい。美術館はプラットフォームで、多くの人が来て、何かを得て帰ってもらいたい。アートを楽しむための基盤づくりをするのが美術館の仕事ですので、他館ともノウハウを共有し、文化資源の活用を目指していきます。

池田　アフターコロナの時代、ネット社会での美術館の役割も。

菅谷　ネットでさまざまな美術品が高精細できれいに見ることができる時代になりました。ネットの配信がさらに進めば、仮想現実（VR）の世界が広がり、美術館にとっても厳しい状況が続きます。デジタル映像の作品がどんどん出てきて、遠くない将来には目を通さず、脳に直接訴える作品も現れるかもしれない。そうなったら、美術館という建物や組織はどうなるのか、ということも考えます。

しかし、果たしてそれだけでいいのでしょうか。絵画の鑑賞は、美術史上での評価というより、個人的な体験と結びついています。例えば、佐伯祐三の作品について「昨年亡くなった母と展覧会で観た」「恋人との初めてのデートで観た思い出があります」などと、極めて個人的な感想をよく聞かされます。そのように美術館に来て見ることはとても重要な体験となっています。

美術館経営は非常に厳しくなっています。かつて何十万人もの来場者で成立していた展覧会が、コロナが終息後もそのまま、多くの人に美術館に来てもらえるようになるでしょうか。それでも、作品を見たい、美術館に行きたいという需要がなくなったとは考えていません。

多くの方々に足を運んでいただける展覧会の開催はもちろんですが、訪れること自体が楽しみとなるような施設や機能を備えています。市民にとって「ここから始まるアート」を動かすプラットフォームとなることを大阪中之島美術館は目指しています。

館長プロフィール
菅谷富夫（すがや・とみお）
1958年、千葉県生まれ。明治大学大学院博士前期課程修了後、90年に財団法人滋賀県陶芸の森学芸員。92年から大阪市立近代美術館建設準備室学芸員。大阪中之島美術館準備室長を経て2019年、同館長。近代デザイン、写真、現代美術の分野を担当し、批評・評論活動を行っている。

主な展覧会は「美術都市・大阪の発見」展（1998年）「早川良雄の時代」展（2002年）など。共著に『都市デザインの手法』（1998年）『デザイン史を学ぶクリティカルワーズ』（2006年）など。

●施設概要

館内は5階建て。延べ床面積は約2万12平方メートル。敷地面積は1万2870平方メートルで、建築面積は6680平方メートル。中之島周辺にはこのほか国立国際美術館、大阪市中央公会堂、大阪府立中之島図書館、大阪市立東洋陶磁美術館、こども本の森・中之島など、文化施設が集積している。

同美術館住所は大阪府大阪市北区中之島4丁目。
アクセス：京阪中之島線「渡辺橋」駅より徒歩約5分、大阪メトロ・四つ橋線「肥後橋」駅より徒歩約10分
WEBサイト：https://nakka-art.jp/

●開館記念展覧会は、『Hello! Super Collection 超コレクション展』と『モディリアーニ』

第一弾として、『Hello! Super Collection 超コレクション展 ―99のものがたり―』（2022年2月2日（水）～3月21日（月・祝）を開催します。本展では、同館コレクションの中から代表的な作品を厳選して展示。また、それぞれの作品が収蔵に至るまでやその後の展示活動の中で人びとと紡いできた物語もあわせて紹介されます。

第二弾は、『モディリアーニ ―愛と創作に捧げた35年―』（2022年4月9日（土）～7月18日（月・祝））を開催。イタリアで生まれ、フランスに渡り、エコール・ド・パリの一員として活躍した、アメデオ・モディリアーニ。当館が所蔵する「髪をほどいた横たわる裸婦」（1917年）をはじめ、国内外から集められたモディリアーニ作品を一堂に展示するとともに、同時代のパリを拠点に繰り広げられた新しい動向や多様な芸術の土壌を示し、モディリアーニの芸術が成立した軌跡をたどります。